

明烏(上) (明烏花濡衣)

白雪の

積もるも恋にたくらべて

解けぬ思いを浦里が

どうした縁で彼の人に

逢うた初手から可愛さが

身に染みと惚れぬいて

あけて口惜しき鬢の髪

撫であげ

「浦里もう誰も差合はないかや」

「見世が出たれば今の間は

誰も来る事ではござんせぬわいな」

「ヤレ」

この広い二階に身一つ置き所のないというは

アア因果な身になつた事じゃなア」

「サこの様に堰きせかれさぞ

さぞ気詰まりでござんしょう

それを堪えて下さんすも

みんな私が可愛いと思つてのお志

嬉しゅうござんす

かたじけないわいなア」

抱きしむれば

いやおれ故と引きしめて

物をも言わずしめ合いて

あとは涙にくれけるが

「いつまでこうしていたとても

限りもなき二人が仲

長居する程そなたの身詰まり

この程段々話す通り

かのお人へ色々と手を回し言い入れても

叶わぬ望みと願ひ書まで

突き戻されし身の本意なき」

「そなたも共にと言いたいが

いとそなたを手にかけて

どうなるものぞ長らえて

我が亡きあとで一ぺんの

回向を頼むさらばやと

言い捨て立つを

「アもし 取り付いて

あんまりむごい情けなや

今宵離れてこなさんの

「まめで居さんすその身なら

また逢う事のあるつかと

楽しむこともあるべきが

「かねて二人が取り交わす
起請誓紙はみんな仇

「どうで死なんす覚悟なら

三途の川もこれ

この様に二人手を取り諸共と
なぜに言うては下さんせぬ

殺しておいてゆかんせと

男の膝に縋り付き

身を震わして泣き居たる

「遣り手の萱が声として

「子供や緑や

「工工モ誰も居ないのか

「オ オオ浦里さん工工

「アイ~~~~お萱どん

「何の用でござんす工工

「他の用じゃござんせぬが

「夕べから居続けのあの客人

「ありやどこのお方でござんす工工

「さあどこやらのご子息さんじゃと

「いう事でござんす工工

「イ工~~~~そうは抜けさせぬ

「確かにせかれたあの時次郎

「旦那さんが呼んでじゃ

「ござんせ 工工ござんせ」

「ア これお萱どん

「どうぞ許して下さい」

「一間の内より山名屋四郎兵衛

「工工まだるい~~~~そんな甘口で聞く奴じゃねえ

「さあ おれと一緒にうしやがれ」

「罪も報いも後の世も

「白髪頭のかめかみも

「張り切るばかりのやら腹立ち

「引つ立ててこそ降りにける

「あとに大勢男共

「屏風の内の時次郎

「無二無三に引き出だし

「踏むやら打つやら叩くやら

「すぐに表へ突き出だし

「門の戸はたと閉めにけり。」